

◆吉備池廃寺の調査—第89次

1 調査の経緯と概要

吉備池廃寺は橿原市との境に近い桜井市吉備に位置する（図54）。ここに吉備池という農業用溜池があり、その東南隅と南辺に大きな方形の土壇が2つ東西に並んで存在し、池の堤の一部として利用されてきた。ここからは西に大和三山と二上山が、東に三輪山が、南に多武峯が見渡せる。これらの土壇については従来、寺院説（前園実智雄「磐余の考古学的環境」『考古学論攷』第6冊

1981）と瓦窯説（大脇潔「吉備寺はなかった」『文化財論叢Ⅱ』1995）があった。

1996年に東の土壇の北・西辺で、池の護岸工事が計画されたので、桜井市教育委員会とともに1997年1月から3月まで東の土壇を発掘調査した（図55）。その結果、東南隅の土壇は、東西37m、南北28mほどで高さが2mもある巨大な基壇であることが判明した（『奈文研年報1997-Ⅱ』）。基壇の断ち割り調査と基壇周囲の精査によって、基壇構築にあたっては、まず東西37m、南北27m、

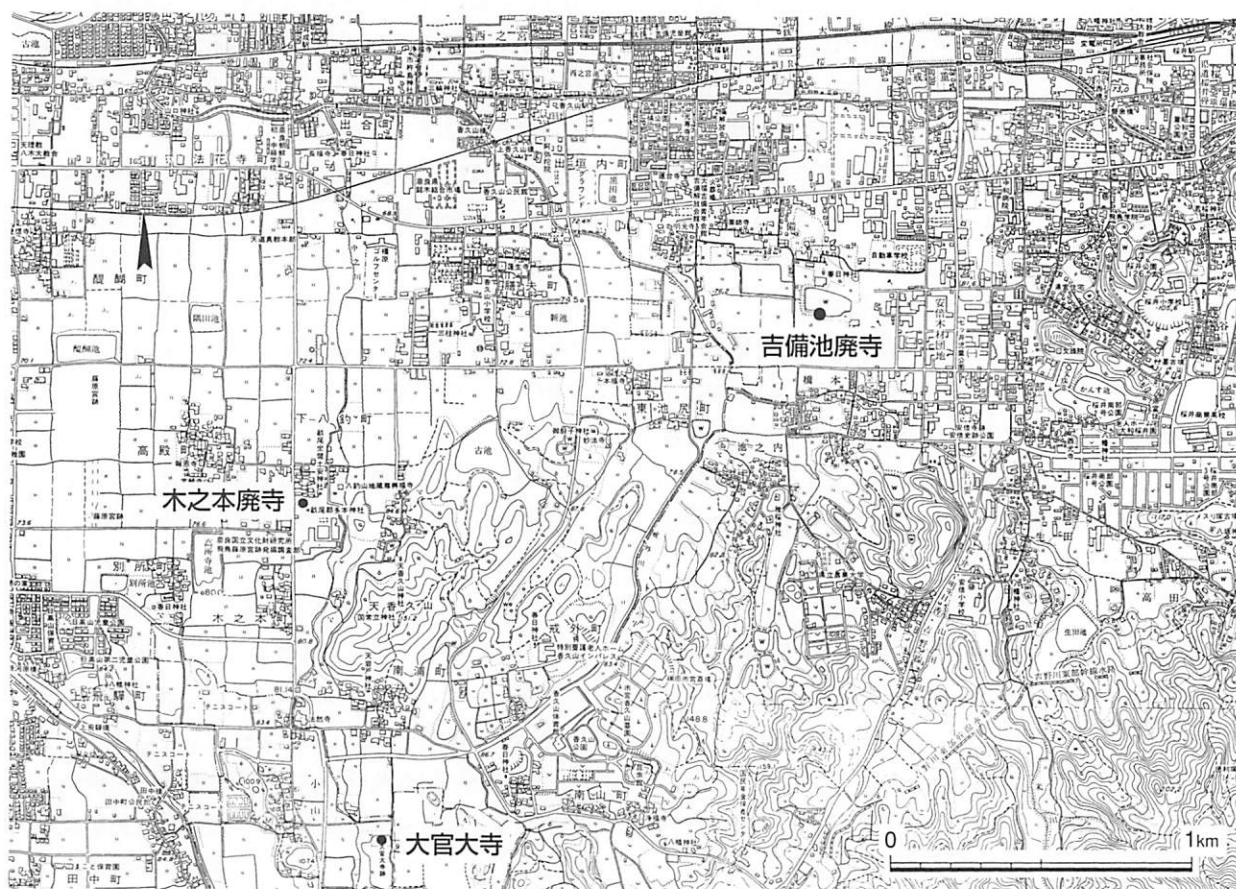


図54 吉備池廃寺位置図 1:25000



図55 吉備池廃寺調査位置図 1:2000

深さ1mの直方体の大きな穴を掘って、そこに石を入れ、版築で基壇の基礎固めをする掘込地業を行い、つぎにその上に版築で基壇土を積んでいたこともわかった。東の土壇は東西に長く、瓦が出土していることから、寺院の金堂とみられ、そうであればその大きさは飛鳥時代で最大となる。出土した軒瓦が山田寺式軒瓦の祖型とみなされるので、東の土壇の年代は、山田寺の造営が始まる641年よりやや古いと考えられる。そこでこの基壇は、639年に舒明天皇が発願した百済大寺の有力な候補と推定され、学界に衝撃を与えた。

それではその西54mにある土壇は何だったのか（図55）。その解明と回廊などの建物跡の有無を確認するために、1998年1月から3月まで発掘調査を実施した。それに先だって行った地中レーダー探査（奈文研埋蔵文化財センター西村康による）では、土壇部分は固くしまっ

た状態であるという反応が出たので、基壇の可能性がきわめて高くなった。発掘調査の結果、この土壇も版築工法によって積み上げられ、一辺が約30m四方、高さが2.1m以上もある巨大な基壇であることが判明した。しかも、その中心に心礎の抜取穴があったので、塔の基壇であることも確定した。さらに、塔基壇の南方約30mのところでは回廊の痕跡を検出した。吉備池廃寺は法隆寺式伽藍だったのである。

2 塔の遺構

西基壇では北側がすでにコンクリートで護岸されているので、基壇の東・西・南辺を確定し、心礎に関わる情報を得ることを目的として調査区を設定した（図56）。基壇上は現在柿栽培が行われており、上面は後世の掘削によって南に向かって低く傾斜している。厚さ20～30cm

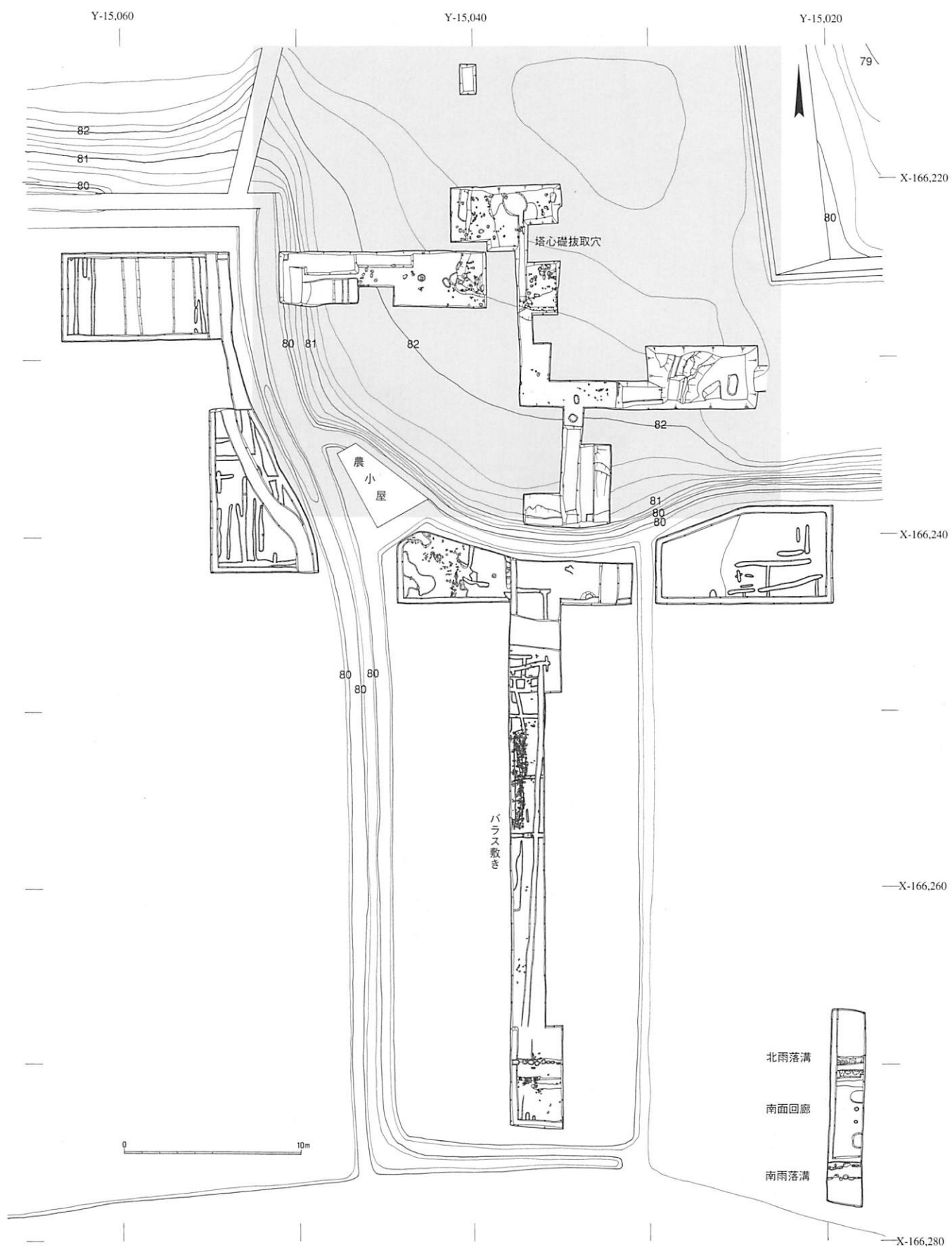


図56 吉備池廃寺遺構図 1 : 300

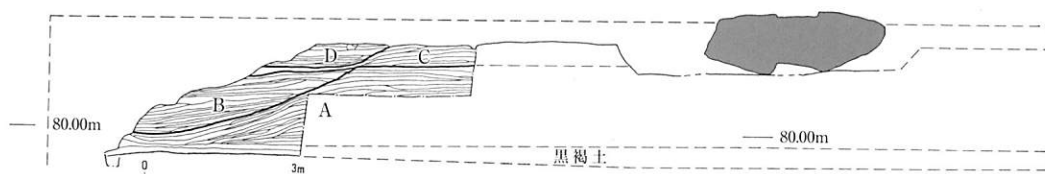


図57 塔基壇中の斜路と基壇構造の復原 1 : 150

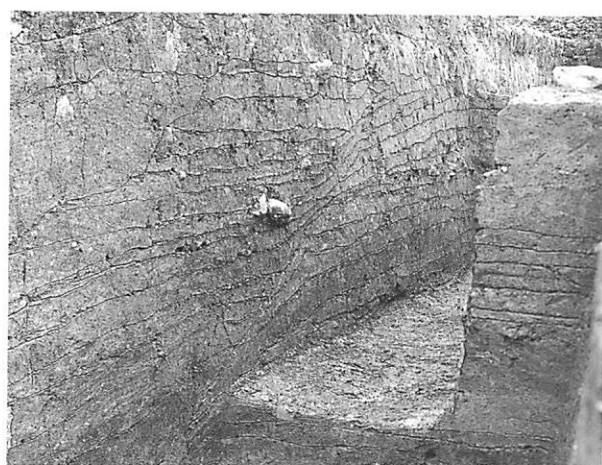


図58 塔基壇中の斜路 西区断ち割りの北壁

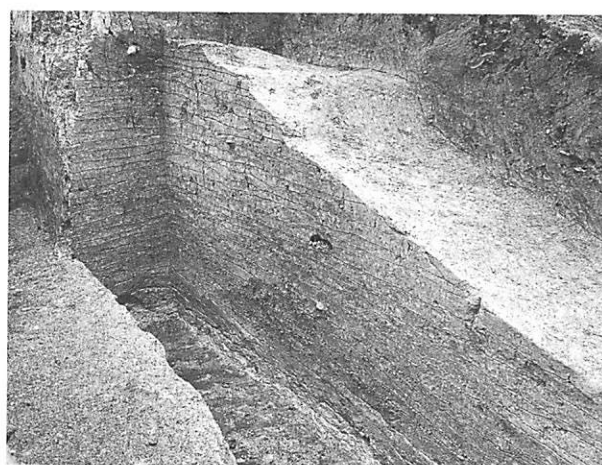


図59 塔基壇中の水平な版築 南区断ち割りの東壁

の耕作土とその下に厚さ10～20cmの基壇攪乱土があり、それらを除去すると、赤褐色の固くしまった基壇土が現れる。基壇土は花崗岩の風化土を利用したものである。

心礎抜取穴 西基壇平面と地中レーダー探査結果、さらに金堂基壇の東西方向の中軸線から、この基壇が塔であった場合の中心を事前に予想した。それに非常に近い位置で、東西約6m、南北8m以上の長方形の巨大な穴が検出された。残存する深さは約40cmである。その底には根石とみられる人頭大の石が多量に残っていた。この穴は大きさと位置から、巨大な心礎の抜取穴であると断定した。西基壇は塔であり、東基壇が金堂であったことも改めて確認できた（口絵参照）。

抜取穴が長方形なのは、心礎が長方形だったからか、あるいは巨大な心礎を抜き取るにあたって、心礎を北側へ引き上げるための傾斜面を作ったからなのか、いずれかの可能性を考えている。心礎の破片は残っていなかったが、前述のように人頭大の石の一部は、心礎の根石である。

基壇規模 断ち割り調査によって、基壇土は現土壇の縁辺近くまで残っていることが確認できた。心礎はその抜取穴の南寄りにあった可能性が高いので、幅3mほどの心礎を想定して、心礎の心を仮定した。ここから基壇土

がもっとも遠くまで残っている土壇南側までの距離が、約15mあるので、この基壇の規模は少なくとも一辺約30mに復原できる。

基壇土の残存高は、旧地表面の暗褐色土層からもっとも高いところで約2.3mある。吉備池廃寺の塔心礎抜取穴に、参考までに尼寺廃寺の厚さ約1.2mの日本最大級の心礎を置いてみた（図57）。この心礎の頂部付近まで版築層を積んでいたとすれば、基壇高はさらに70cm高い2.8mほどであったと推定できる。

基壇外装については、基壇土の削平により、その痕跡を認めることはできなかった。また基壇外装に使用された石材も、まったく残されていない。

整地 塔基壇では掘込地業を行わず、旧地表である暗褐色土や暗褐色砂質土上面に厚さ20～40cmの整地をしてから、版築を行っている（図57）。整地土は南寄りが厚い。整地の範囲は基壇の下だけでなく、その周辺にまで及んでいる。整地の目的は2つあろう。1つは、塔基壇では掘込地業をしていないので、旧地表面に整地層を盛って、地盤を落ち着かせるためである。第2に、旧地表面は現地表面と同様に、東から西に向かって緩やかに低く傾斜している（金堂基壇の西端から塔基壇の西端



図60 塔南面のバラス敷 北から



図61 南面回廊 北から

までの78mで約40cm低くなる)、基壇の版築を行う一帯をより平坦にするためである。ただし、このような金堂基壇における掘込地業との差は、金堂と塔の建設の微妙な時期差を示す可能性がある。

4工程をたどる基壇構築 基壇西辺での断ち割り調査によって、基壇版築層は大きくA、B、C、Dの4ブロックにまとめられ、A→B→C→Dの順序に積んだと復原できる(図57)。

Aブロックは基壇縁辺部寄りでは傾斜して版築し、基壇中央部寄りではほぼ水平に版築する。つまり、その版築層は基壇縁辺部寄りでその傾斜を徐々に強くして、整地層上面となす角度を最終的に最大20度ほどにする。この傾斜面はそのまま基壇上面に続かず、基壇土半ばでほぼ水平にする。さらに、この水平部分の上面には心礎抜取穴の位置まで、小バラスを突き固めている。

BブロックはAブロックの傾斜面上にのり、Aブロックの水平部分の上面に天端をそろえ、版築層の上面をいったんほぼ水平にする。その傾斜は10度から徐々に弱ま

っている。しかし、Bブロックの上面にはAブロックのような小バラス敷はない。

CブロックはAブロックのバラス面の上とBブロックの上面の一部にのり、心礎寄りでは水平に積むが、西端ではやや斜めに積む。Cブロックのなかには心礎の根石と同大の石が入っているので、据え付けた心礎をより不動にする目的があった可能性がある。北・東・南側では、心礎抜取穴に関わる断ち割りをしていないので、Cブロックの工程が心礎の周囲全体に及んでいたか否かは不明であり、将来の調査に託したい。

DブロックはBブロックの上とCブロックの傾斜面の上ののり水平の版築層である。おそらくCブロック上面と天端をそろえて、基壇土構築をほぼ完成させたと考えられる。この時に基壇土を完全に積み終えてから、礎石の据付掘形を掘ったのか、あるいは先に礎石を据え付けてから、基壇土を積み終えたのかは不明である。

この問題は礎石位置の確認とともに、今後の塔基壇の全面調査に委ねたい。

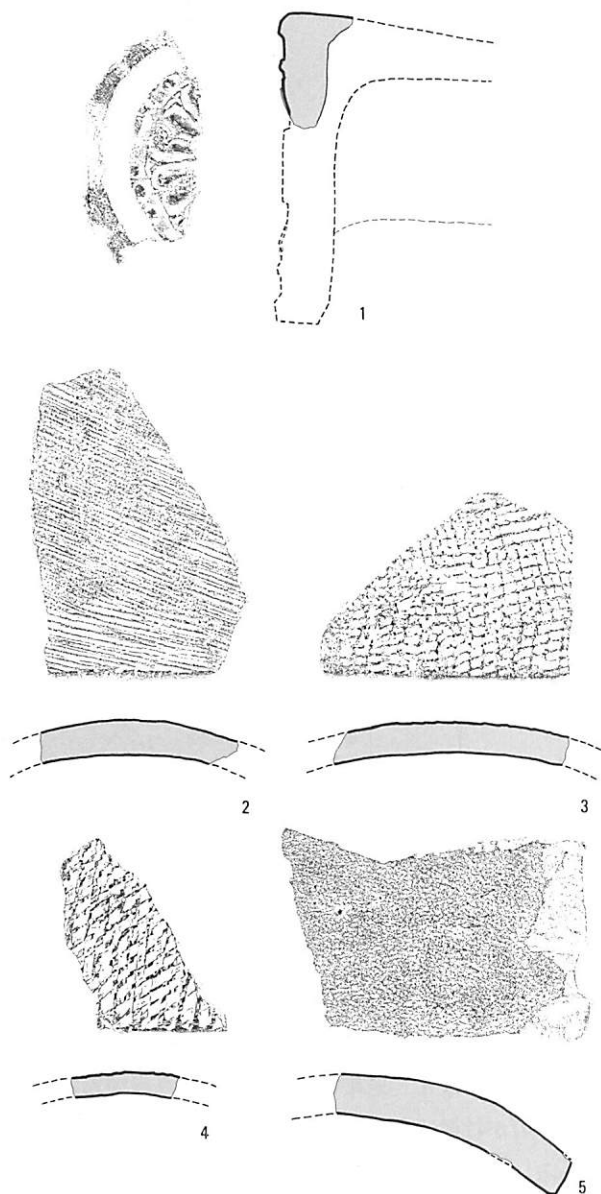


図62 吉備池廃寺（第89次）調査出土瓦 1：4

心礎を引き上げた傾斜面 Aブロックの西辺はなぜ傾斜面をなすのか。基壇版築層の断面を西辺、南辺、東辺で比較した。南辺と東辺では、通常の基壇と同様に、下から上までほぼ水平に版築層を積んでいる（図59）。これに対して、西辺のAブロックでは明らかに斜面を作ること意図して積んでいる（図58）。さらに、Aブロック上面の小バラス面と心礎抜取穴の底面の高さは近接している。この傾斜面は心礎を引き上げるための傾斜面で、小バラス面に達した心礎を水平に移動して、基壇中心に据えたのであろう。

このような傾斜面は香芝市の尼寺廃寺の塔基壇中にもある（香芝市教育委員会『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報5』1996）。尼寺廃寺では北側の版築土中に傾斜面を設けている。この傾斜面は目下2列しか確認されていないが、塔基壇に特有なものであるため、吉備池廃寺の西基壇

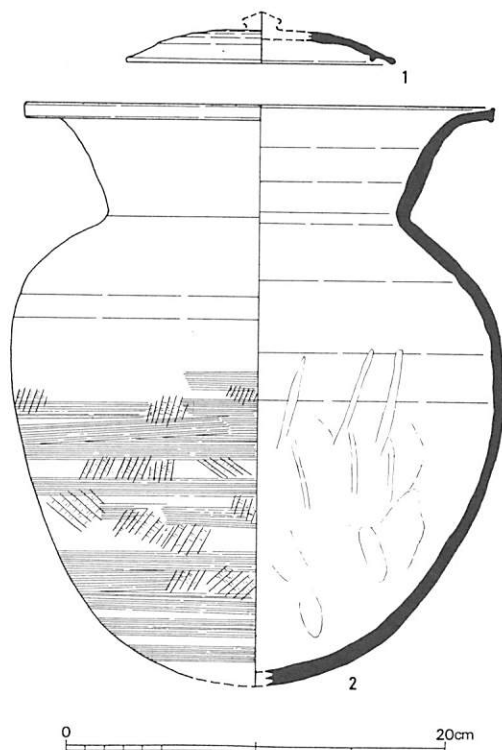


図63 塔心礎抜取穴出土土器 1：4

が塔であったということの有力な証拠となる。吉備池廃寺の塔心礎は、西側から引き上げたのである。

階段の出の可能性 塔基壇南西側にバラス敷があり、それが南辺中央付近で直線的に途切れる部分があり、南の階段の可能性を考えた（図60）。しかし、基壇の南・東側にバラスが続かないので、確証は得られていない。

3 南面回廊の遺構

塔基壇南方の水田部分に設けた2箇所の調査区で、幅50cmの東西方向の石組溝を、その北で石組を抜き取った東西溝をあいっいで検出した（図56・61）。2条の東西溝の方位は、金堂と塔の東西軸に平行しているので、これらを南北の雨落溝とする南面回廊と断定した。溝の心心間距離はほぼ6mで、回廊の基壇幅は5.5mである。これは飛鳥時代では平均的な基壇幅である。基壇部分で掘込地業は行っていない。基壇土は後世の削平がひどく、最下層のごく一部が残っているにすぎない。東側の調査区では、礎石抜取穴と思われる一対の浅いくぼみを検出したが、基壇外装は確認できなかった。回廊の詳細は、将来の広い面積での調査に委ねることにしたい。

4 その他の遺構

塔基壇の南辺から南へ9mから15mのところ、拳大の河原石を使ったバラス敷を検出した（図56・60）。この礫敷が塔基壇の南西側に部分的に残っていたバラス敷

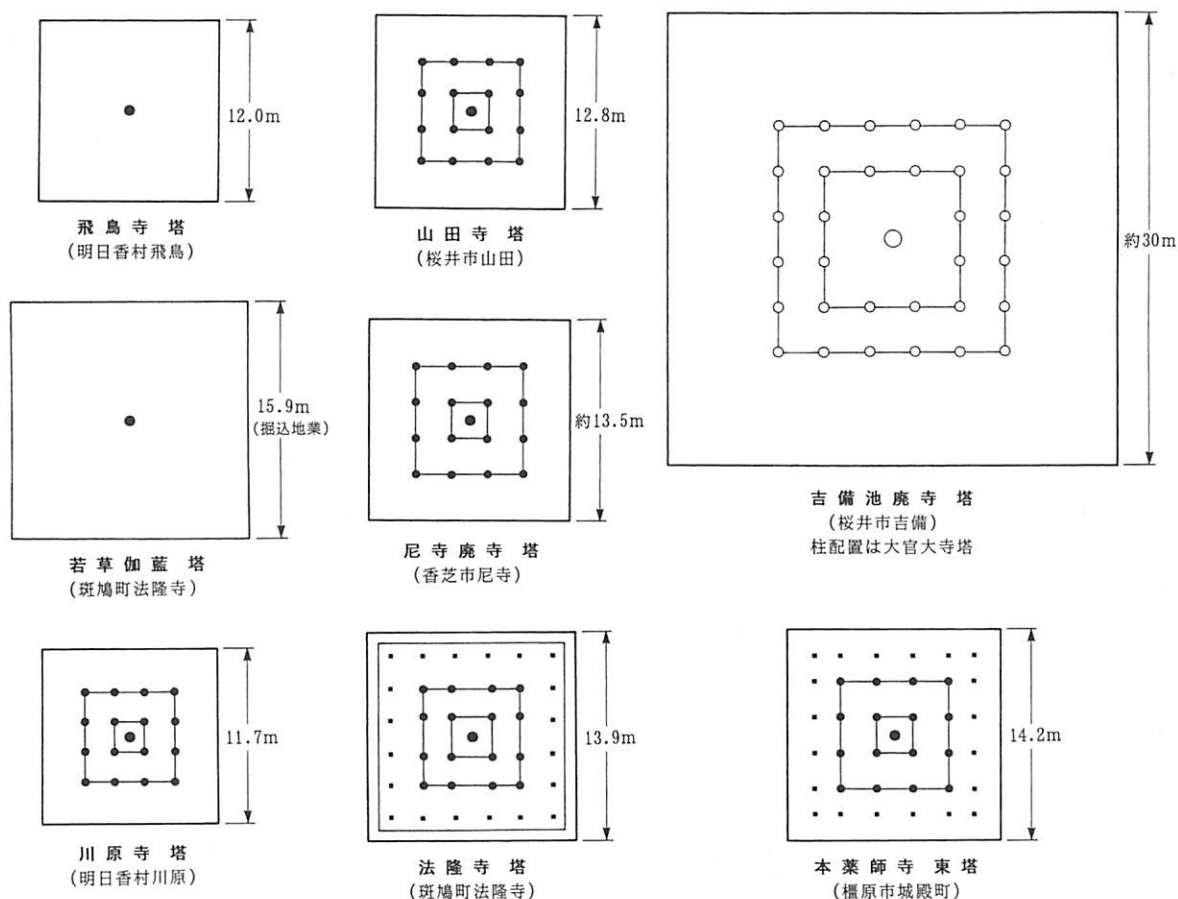


図64 飛鳥時代の塔平面規模の比較 1:500

に連続するのか、本来この南側にも広がっていたか否かについては不明であるが、東側は南北にほぼ直線的になっている。この位置は、先に塔基壇の階段の可能性を考えた部分の南側にあたり、東辺の見切り石こそないが、参道の存在を想定することは可能である。バラス敷は西側の未調査区に広がっているので、その性格については将来その位置を調査するときに、あらためて検討したい。

5 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、若干の瓦のほかに土器などがわずかにあるにすぎない。以下、瓦と土器について概略を述べる。

瓦 吉備池廃寺の軒瓦は出土していないが、平安時代中期にあたる10世紀頃の軒丸瓦が1点ある(図62-1)。塔基壇の西方から出土した。紋様は全体に平板である。外区内縁に比較的密に珠紋をめぐらし、それと外縁との間が一段低くなる。外縁は低い素紋の直立縁である。同范例は未確認である。

丸瓦は25点(3.5kg)、平瓦は203点(17kg)が出土した。ともに厚手品(厚さ1.8~2.5cm)と薄手品(1.2~1.6cm)がある。両者は金堂基壇の調査時でも出土した。

薄手品は重量比によれば、丸瓦の1%、平瓦の10%を占める。厚手品は丸・平瓦ともに凸面の叩き目を完全になで消すのが特徴である(図62-5)。丸瓦はすべて玉縁式である。薄手品の平瓦には凸面を完全になで消すもののほかに、平行叩き(図62-2)、正格子叩き(図62-3)、斜格子叩き(図62-4)を施すものがある。薄手品は厚手品と比べて硬質で、青灰色か灰白色を呈するものが多い。**土器** 塔心礎の抜取穴から須恵器の蓋(図63-1)と甕(図63-2)の破片が出土した。7世紀後半の製品である。

6 まとめ

巨大な塔基壇 今回検出した基壇は、巨大な心礎の抜取穴と心礎を引き上げた傾斜面の存在などから、塔であることは確実である。その平面規模は、一辺が約30m四方に及ぶ巨大なものである。また、基壇高も2mを大きく越えると推定される。

吉備池廃寺の塔基壇の平面規模を、飛鳥・白鳳時代の主要寺院と比較してみる(図64)。吉備池廃寺の塔はほかの塔に比べて4倍近い面積をもち、飛鳥・白鳳時代最大級の塔基壇であったことがわかる。

その巨大さと比肩できるのは、大官大寺の塔基壇だけ

である。大官大寺の塔基壇の一辺は36~37mであるが、基壇外装の設置にまでは至らず、さらに少なくとも東辺は角度25度の傾斜面を残したまま、未完の状態で焼亡したことが判明している（『藤原概報9』）。塔基壇の平面規模については、2つの解釈の可能性がある。1つは、傾斜面を削り落して、一辺30m程の基壇にする計画だったという可能性である。2つ目は、傾斜面が吉備池廃寺の塔と同様に、心礎やその他の礎石を引き上げるためのものだという可能性である。後者であれば、傾斜面に版築を積んで水平にする計画だったということになり、基壇の一辺は36~37mとなる。いずれにせよ、大官大寺の塔基壇は飛鳥・白鳳時代最大であった。その高さも少なくとも2mと推定されている。

心礎の大きさと深さ 心礎の抜取穴が巨大なのは、心礎が巨大だったからであろう。大官大寺の発掘調査所見によれば、明治時代に抜かれた塔心礎の抜取穴の東西幅は5.4mである。これは吉備池廃寺の心礎抜取穴の東西幅6mに近い。岡本桃里は大官大寺の塔心礎の見取図と寸法を明治時代に記録している。それによると、心礎の大きさは、南北約3.6m、東西約3mである。また、奈良県香芝市の尼寺廃寺の塔心礎は約3.8m四方、東大寺の東塔心礎の長径は約3.8mで、いずれも日本最大級である。吉備池廃寺の塔心礎の抜取穴の大きさから考えて、そこにあった心礎の大きさも、尼寺廃寺や東大寺に匹敵する大きさだったと推定される。

吉備池廃寺の塔心礎は、基壇の中央のかなり深い位置に据えられた地下式心礎であると、当初予想していた。それは飛鳥寺、山田寺、尼寺廃寺など多くの飛鳥時代の塔の心礎が地下式だからである。これに対して、吉備池廃寺では基壇の相当上部（旧地表面の暗褐色土層から1.5m上）に据えられている。前述したように吉備池廃寺でも尼寺廃寺規模の心礎（厚さ1.3m）が据えられていたとすると、心礎の頂部が地上に露出している場合の基壇復原高は2.8mである（図57）。もし地下式心礎に拘泥すれば、基壇高は3mを越す異常な高さに復原されることになる。心礎は地上式であったと考えたほうが妥当であろう。

大官大寺の塔初重の規模 吉備池廃寺の塔基壇も心礎も巨大だった理由は、この上に立っていた建物が巨大だったからであろう。基壇規模が唯一近い大官大寺では、『大安寺伽藍縁起併流記資財帳（以下、縁起）』によると、

文武朝（7世紀末~8世紀初頭）に九重塔が建てられたと伝えている。大官大寺の塔の建物礎石は側柱5間四方（1間10尺等間）、入側柱3間四方で、四天柱のない特異な配置ではあるが、初重の一辺が50尺（約15m）と考えられており、飛鳥・白鳳時代最大の平面規模をもつ（図64）。日本最大の塔である東大寺の東塔と西塔は七重塔であるが、その初重はともに一辺55尺（約16.5m）、高さは東塔で33丈8尺7寸（約101.6m）、西塔で33丈6尺7寸（約101m）である。両者の初重の平面規模を比較すると、大官大寺の九重塔の高さも80~90mはあったことになる（『藤原概報9』）。

ただし、大官大寺の塔初重の平面規模については、再考の余地がある。それは基壇の平面規模を一辺30mとみようが、36~37mとみようが、一辺約15mの初重と比較すると、基壇平面は異常に大きい。そこで5間四方の外側にさらに7間四方の側柱を立て、初重を一辺約21mと考えたほうが、基壇上での収まりはよく、初重の軒の出の問題も解決する。韓国にある新羅皇龍寺にも645年創建の本造の九重塔があり、礎石が残っているので、初重の側柱は7間四方で、一辺22mであることがわかる（金東賢「皇龍寺の発掘」『佛教藝術』207号）。『三国遺事』などの史料と舍利函に刻まれた塔の修理記録によれば、塔の高さは約80mであった。韓国国立文化財研究所の金東賢所長が描いた復原図は、日本の五重塔と比べて膨らんだ感じがするが、九重塔を安定して支えるためには、各重の平面規模を広くすることが必要なのであろう。

吉備池廃寺の塔も九重塔か 吉備池廃寺の塔基壇では、心礎以外の礎石位置に関する情報が不明なので、『藤原概報9』における大官大寺の初重平面案を借用して、吉備池廃寺の塔基壇に重ねてみると、十分入る上に、さらに建物端から基壇端まで7.5mも空間が残る（図64）。吉備池廃寺塔初重の規模は、前項で提示した大官大寺の初重平面改訂案のように、7間四方と解釈するか、柱間が東大寺七重塔のように広がったと解釈するかである。ともあれ、吉備池廃寺の塔基壇と心礎抜取穴の巨大さからみて、そこに大官大寺に匹敵する九重塔が建っていた可能性は、きわめて高い。

最古級の法隆寺式伽藍配置 今回の調査によって、東に金堂、西に塔があり、そのまわりに回廊をめぐるということが判明したので、吉備池廃寺の伽藍配置は、法隆

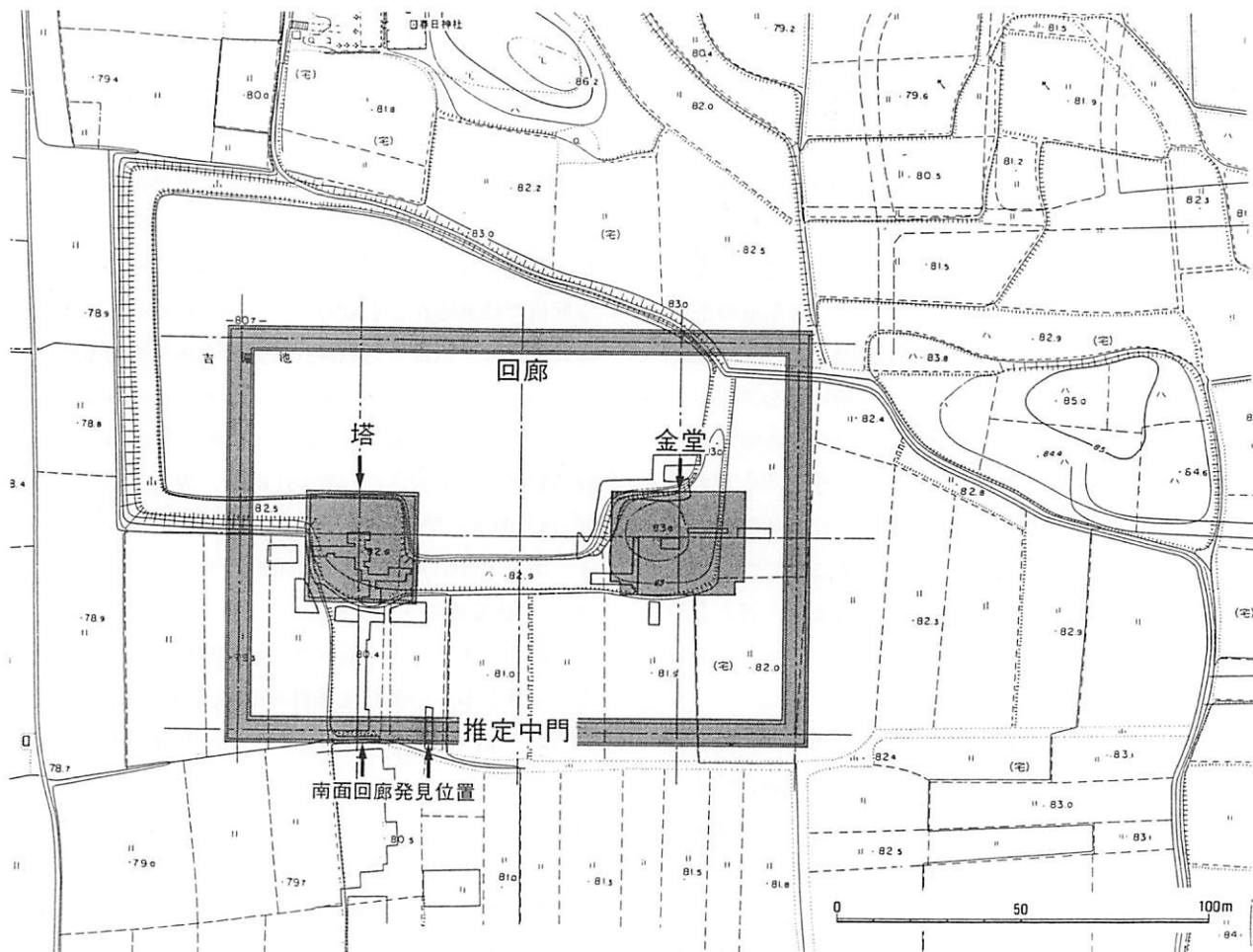


図65 吉備池廃寺の推定伽藍配置 1:2000

寺式であることが確定された。しかも、従来発見された軒瓦の年代によれば、最古級の法隆寺式伽藍となる。

東西両基壇の心の間距離が84.6mと長大なことから、広大な伽藍が想定されるが、南面回廊の発見によって、その広大さがさらに具体的になりつつある。金堂の掘込地業の南北の中心軸から南面回廊南端までの距離が56mであるので、これを北に折り返して求められる回廊の南北規模は112mである（図65）。これは法隆寺西院回廊の南北規模（約63m）の1.8倍もある。吉備池廃寺の回廊の東西規模は来年度以降の調査で明らかになるだろうが、法隆寺西院回廊の南北規模と東西規模（90.5m）の比率と同一であったと仮定すれば、吉備池廃寺の回廊の予想東西規模は160mにもなる。この推定によれば、回廊の位置の、3分の1が吉備池にかかるが、南面・東面回廊のすべて、西面回廊の南半分、北面回廊の一部も、現水田部分で発見される可能性が高い。

南北2条の雨落溝を検出した調査区のある水田から、その東側の水田にかけては、南端の畦が南へ向かって突出している。ここが塔基壇と金堂基壇の中間の南方にあたることを考慮するならば、中門の基壇を反映している

可能性がある。吉備池の北の堤と春日神社の小丘の間にある水田部分では、講堂の発見が期待でる。さらに、僧房や大垣、そこに開く東西南北の門についても、今後追究していくことになる。なお、金堂と塔は基壇の北辺をおおむねそろえているものの、それぞれの南北の中軸線が一致していない点も、今後の検討課題である。

百済大寺の可能性 昨年の金堂基壇の調査の結果、吉備池廃寺は639年に舒明天皇の発願で建設が始まった百済大寺の可能性があると報告した。今回の調査によって、吉備池廃寺の塔は九重塔であった可能性がきわめて高くなった。『日本書紀』と『縁起』によれば、日本で大官大寺造営以前に九重塔があったのは、百済大寺だけである。さらに、南面回廊の発見によって、吉備池廃寺が飛鳥時代では比類のない壮大な伽藍であったことも明確になった。したがって、吉備池廃寺が百済大寺であった可能性も、一層高まったことになる。

東アジアの九重塔の流れ 東アジアにおける九重の木造塔といえば、516年に靈太后胡氏の発願で造営された北魏の首都洛陽の永寧寺が、おそらく歴史上最大規模を誇る。史料の検討によれば、相輪を含む高さは147mもあったと

いう。その後、隋の文帝と煬帝が長安に建てた木造塔も、100m級であった。そして、日本で舒明天皇が百済大寺の造営を発願した7世紀前半には、百済の武王が益山の弥勒寺に、新羅の善徳王が慶州の皇龍寺に、それぞれ九重の木造塔を建てている。皇龍寺の九重の高さは約80mである。東アジアにおけるこのような超一級の塔は、皇帝、王、天皇及びその一族が関与して建てられたものばかりであり国家的シンボルとして威容を放っていたことであろう。

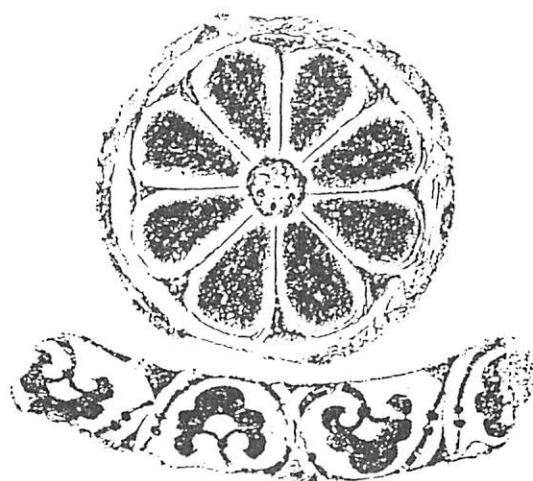
その後の吉備池廃寺 『縁起』によれば、子部社神の怨みによって、九重塔は焼けたとあるが、今回も金堂基壇の調査と同様に、火災を示す証拠は一切ない。

つぎに、塔基壇とその周辺の調査では、吉備池廃寺の所用軒瓦は1点も出土していない。出土した丸・平瓦の特徴は、金堂基壇調査時出土のものと同様であり、640年頃に製作された所用軒瓦に伴うものに限定される。しかし、その出土量は昨年より少ない。金堂や塔の基壇外装の石材も、心礎やそのほかの礎石も残されていない。今回のこのような状況は、寺院の存続期間が短く、建築資材を移建先で再利用したことが原因とする従来の見解を、支持するものである。

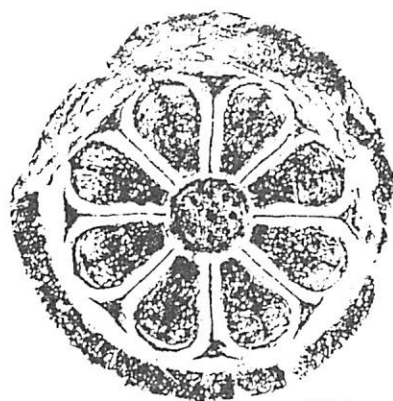
吉備池廃寺が百済大寺である可能性が一層高まった現在、その移建先である高市大寺の所在地も問題となる(小澤毅「吉備池廃寺の発掘調査」『仏教藝術』235号1997)。吉備池廃寺と同範の軒瓦と同一の丸・平瓦が出土した木之本廃寺も、その候補として有力視されており、都多本神社付近での今後の調査が注目される。今回、塔心礎抜取穴から7世紀後半の土器が出土したということは、塔を含む吉備池廃寺の移建年代を考える上で、非常に重要である(図63)。それは百済大寺が移建されて高市大寺となった年代が、『縁起』や『日本書紀』によれば天武2年(673)だからである。

吉備池廃寺の軒瓦 吉備池廃寺と木之本廃寺から出土したいわゆる山田寺式軒丸瓦には、IAとIBの2種がある。吉備池廃寺は639年から造営された百済大寺である可能性が高いので、吉備池廃寺の2種の軒丸瓦が最古の山田寺式軒丸瓦になろう。

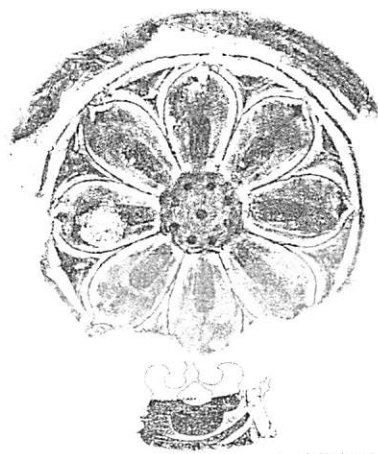
軒平瓦にも忍冬紋のスタンプを押したIb₁とそれに三重弧紋を加えたIb₂の2種があり、木之本廃寺では、これらを2種の軒丸瓦と組み合わせてきた。しかし、セット



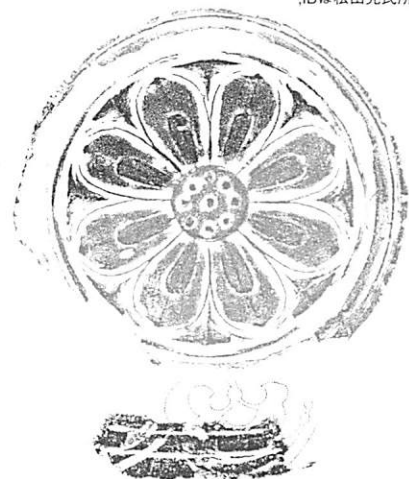
1 法隆寺7Aa-213B



2 法隆寺8B



3 吉備池廃寺IB-Ib₁
IBは松田光氏所蔵



4 吉備池廃寺IA-Ib₂

図66 吉備池廃寺の軒瓦とその成立過程 1:4

関係については従来厳密には検討されず、I A・I b₁とI B・I b₂の2セットが公表されてきた（大脇前掲書）。その原因は、先に調査が行われた木之本廃寺では基壇などの遺構が未発見で、吉備池廃寺でも1996年以前は寺院であるという確証が得られていなかったもので、金堂や塔という建物との関係で、軒瓦を検討する機会がなかったからである。

今回、吉備池廃寺では金堂と塔の存在が明確となり、軒瓦2セットの所用先を検討する必要が出てきた。軒丸瓦I Aは弁の子葉の幅が不ぞろいで、中房蓮子にも整った配置をしていない部分がある。これに対して、軒丸瓦I Bは弁の子葉の幅も中房の蓮子の配置も整然としており、型式学的にはI Aよりやや先行すると考えられる。軒平瓦でもI b₁が、新要素である重弧紋をもつI b₂に先行する可能性がある。そこでまず、従来公表されてきたセットの組み合わせを、I B・I b₁とI A・I b₂に変更する提案をしたい。そして、日本古代の寺院造営は、塔より金堂が先行することから、I B・I b₁を金堂のセット、I A・I b₂を塔のセットとする仮説を提示しておきたい（図66-3・4）。回廊や講堂などのほかの建物の軒瓦については、新形式の軒瓦が出土する可能性も含めて、今後の調査結果を待って検討することになろう。

山田寺式軒瓦の成立について 最後に山田寺式軒瓦の成立過程についてまとめておく。まず、最古の山田寺式軒丸瓦であるI A・Bは、弁端が尖り、中房の縦断面が半球形をなし、1+8の蓮子を置く。これらは山田寺式軒丸瓦に先行する船橋式軒丸瓦にみられる特徴である（花谷浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』158 1993）。とくに、法輪寺創建用で、若草伽藍（斑鳩寺）でも補足用に葺かれた法隆寺8Bは、船橋廃寺式軒丸瓦の中でも外縁幅が広く、重圏紋をめぐる空間が確保されていることから、I A・Bの祖型となったのではないかと考えられる（図66-2）。法隆寺8Bは法輪寺塔心柱の基部から、重弧紋軒丸瓦とともに出土したので、このセットが塔に先行して建てられた金堂用とみられ、なお、そうであれば、法輪寺は吉備池廃寺に先行する最後の法隆寺式伽藍となる可能性がある。

それではI A・Bに始まる弁の子葉と外縁の重圏紋の由来は何か。その鍵は、法隆寺西院伽藍金堂に安置されている釈迦如来像などの光背にあらう（井内功「山田寺瓦当紋様の遡源」『古代瓦研究論誌』1982）。推古31年

（623）に製作された釈迦如来像は元来、斑鳩宮の仏殿か若草伽藍に安置されていたという説が有力である。その光背には内側から子葉をもつ単弁10弁蓮華紋、輻線紋、重圏紋、連珠紋、忍冬紋を同心円状にめぐらしている。I A・Bは法隆寺8Bを下敷きにし、そこに光背に使われた子葉と重圏紋を新たに付加して成立したのではないだろうか。I A・Bの成立には斑鳩の上宮王家系の造瓦組織や仏師が関与していた可能性がある。

軒平瓦I b₁の型押し忍冬紋が、若草伽藍のスタンプ（213B）を再利用したものであることも、I b₂に付加した重圏紋が、本来仏像光背の重圏紋を模したロクロ引きの重弧紋を分割したものであることも、この考え方の妥当性を示すものである（図66-1）。しかし、それは斑鳩の瓦工や仏師を丸抱えて再雇用するというあり方ではなかったようである。たとえばI b₁・I b₂の瓦当厚は213Bの3分の2しかないので、忍冬紋は部分的にしか表出されない。つまり、I b₁・I b₂を製作した工人は、若草伽藍の瓦工房で創作された軒平瓦というものを熟知していなかったのである。さらに、640年頃であれば、中宮寺、斑鳩宮仏殿、若草伽藍北方建物に葺いた日本最初の范型（均整忍冬唐草紋）による軒平瓦215Aの影響がなかった原因についても、今後の検討課題として残る。

さて、吉備池廃寺にやや遅れる642年頃に完成した山田寺金堂の創建用の山田寺式軒丸瓦には、弁の尖りが無い。弁の輪郭線がない、間弁基部が中房に達する、中房が半球形から円柱形になる、蓮子が1+6になる、外縁の重圏紋が四重になるという変化がある。丸瓦の瓦当への接合技法も、丸瓦広端の凹面側を片柄形に加工しており、法隆寺8Bや吉備池廃寺I A・Bが楔形加工であるのと異なる。四重弧紋軒平瓦は段頸であり、吉備池廃寺I b₁・I b₂が直線頸であるのと異なる。山田寺の瓦工集団は、吉備池廃寺の軒瓦紋様をモデルとしながらも、技術的にはかなり独自の集団であったことがわかる。

吉備池廃寺における新たな軒瓦紋様の成立、そして壮大な伽藍の成立の背景には、最初の官寺造営という大きな息込みがあり、九重塔の造営も、東アジア諸国を意識したものであろう。これらの点を一層明確にするためにも、吉備池廃寺の今後の調査のもつ意味は大きい。

（佐川正敏）